
矛盾の魔法使い

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

矛盾の魔法使い

【Nコード】

N1999X

【作者名】

TR

【あらすじ】

魔法使いと非魔法使いによる格差が広がる世界。

そしてとある町に降り立った少年。

その少年は”魔法使いなのに魔法が使えない”と言う、大きな矛盾を抱える者だった。

これはその矛盾を抱えた少年の物語である。

*この小説は『暇零式戯言集ver5.45』にて掲載させていた
だいております*

第1話 到着した場所は準田舎？

「■■さま。お待ちせしました」

それは昔の思い出^{記憶}だ。

「息子さんの魔法適性は……………」

目の前にいるのは白衣を来た医者。

「じいさん」

その宣告が、俺にとっての地獄の幕開けとなるものであった。

矛盾の魔法使い 第1話「到着した場所は準田舎？」

「はっ！！？」

目を開けると飛び込んでくるのは、一面森や畑の自然だった。
聞こえてくるのは等間隔で聞こえる電車の音だった。

「……………なんだ、夢か」

俺はほつと胸を撫で下ろす。

俺の名前は、尾崎^{おのき}圭一^{けいち}、どこにでもいる高校生だ。

俺はこれから通うことになる高校がある場所へと向かっていた。

『次は終点、鳴神です。お荷物のお忘れ物がないよう、ご注意ください』

そんな時、終点を知らせるアナウンスが聞こえてきた。俺は急いで席を立つと、ドアのほうに歩いて行った。こうして、俺は鳴神市に降り立ったのだ。

——鳴神県

一言でいえば農業で盛んな街だ。都会と言うよりは準田舎の方がしっくりくる。畑しかなく、交通があまり発達していないのがその理由だ。かくいう俺も、そういう場所でないといけないわけがあった。まあ、目的地はここよりは断然都会なのでいいことには良いが。

「えっとバスは……30分後!？」

突然の洗礼だ。

俺が行くのは鳴神高校だ。

鳴神県で有数の進学校で、競争率が高くて有名だ。そして俺は上栄荘かみえいそうに下宿して通うことになっている。

その上栄荘があるのが鳴神県鳴神市なのだ。

「とにかくバスを待つか」

俺は停留所にあるベンチに腰かけて、バスが来るのを待った。

「まだか……」

過ぎ去ること15分。

俺はまだバスを待っていた。

今の季節は5月の中旬とも相成って、ただ単に熱いのだ。

（こんなんだつたら、厚着してくんじゃなかった）

朝の予報では冷えると言っていたのを信じて、厚着で来た俺がまるで馬鹿みたいだった。

「のどが渴いたけど、自販機って近くにあったっけ？」

俺はあたりを探すが、そんなものは見当たらない。

（まいったな）

俺が内心で困り果てていた。

「はい」

そんな時、誰かが俺にペットボトルを差し出した。
いつの間にか、目の前に人が立っていたようだ

「え？」

俺は顔を見上げた。

そこにいたのは、ピンク色の髪を短く切り揃えて、目がくつきりとしている少女が立っていた。

「え？　じゃないよ。のどが渴いたって言ってたから、これあげる」

「いや！？　そんなの悪いよー！！」

俺は自分の不注意が招いたことなので、断ろうとしたが、少女は強引だった。

「いいって。それに君ここに来たの初めてでしょ？　だから飲んでいいよ。私はもう一本持ってきてたし」

そう言つて少女はバッグから水筒を取り出した。

「……………そ、それじゃ、お言葉に甘えて」

俺は少女からペットボトルを受け取った。

「よいしょと」

「……………君もこのバスを使うの？」

俺は横に腰かけた少女に聞いた。

「うん。ちよつと用事があつて隣町まで行つてたの」

俺に少女が答えた。

よく見れば少女の服装は青色のシャツを着て、紺色のスカートを穿いていた。

「ん？　どうかしたの？」

「あ、いや！？　なんでもない」

俺は慌ててペットボトルのキャップを開けて中身を口に含んだ。

「ッ！？！？」

その瞬間、口の中に何とも言い難い味が広がった。

そつ、言つなればお茶に砂糖とガムシロップそしてクリームを入れたような感じだ。

「どうかな？　スイート緑茶って言つてね、私のお気に入りなんだよ」

嬉しそうに聞いてくる少女だが、名前通りだ。

「ま、まあいいんじゃないかな？」

俺は『甘すぎだ！！！』とは言えずに、辺り障りのない感想を言う事にした。

「あ、私は中井 奈々（なかないな）って言うの」
「俺は尾崎圭一です」

とりあえず名前を名乗り合うことにした。

「尾崎君だね。ここで会ったのも縁だから、私がバスが来るまで色々教え——って、もう来ちゃった」

俺はこの時ほど時間が経つのが早いと思ったことはなかった。

「まあ、私も乗るから問題はないよね」

中井さんは自分に言い聞かせるように言うと、バスに乗った。それに続くように俺も乗るのだった。

「それじゃ、ここでお別れだね」

「ああ、色々と教えてくれてありがとな」

ようやく到着した鳴神市の停留所で、俺は中井さんにお礼を言った。

「そんな、お礼を言われるようなことはしてないよ」

「いや、中井さんのアドバイスもかなり役に立ったよ」

中井さんのアドバイスは、この街のおすすめスポットや、特色など分かりやすく説明してくれたことだ。

そのおかげで簡単な知識が身についた。

「商店街はこの道をまっすぐ進めば行けるよ」

「ありがとう」

ついでに商店街への行き方を聞いていたのだ。

「何だか、また会えるような気がするね」

「同感だ」

なぜだろうか、中井さんとまた会えるような気がしてなかったのだ。

「もしまた会ったら、その時もよろしくね」

「……こちらこそ」

俺は彼女にそう答えると、中井さんはそのまま歩き出した。

（彼女は魔法使いなのかな？）

俺はふとそんな事を考えてしまふ。

この世界では”魔法”と言うのが存在する。

それはいい意味でも悪い意味でも世界に革命を与えた。

政府は魔法使いの育成機関が重要と言う事で、魔法使いを育成する機関を作り出していった。

魔法＝便利な物。

そんな等式しか頭になかった。

政府は常に自分にとって利益になることしか考えてないのだ。

それがどのような結果になるのかを知らずに

そしてそれに伴って増えたのが魔法使いによる犯罪だ。

相手は魔法使い、普通の人では対抗も出来ない。

それを裏付けるように、魔法使いの育成機関が出来てから魔法を使った犯罪は8割増しとなっているのだ。

強い者が弱い者を虐げる。

あつてはないことだが、それが現実だ。

さらには魔法使いとそうでない物との差がはつきりしている。

魔法適性のある子が生まれた家庭に国は育成費を出すと言う政策を出した。

しかしその裏で、魔法適性のない家庭では税金を増やしているのだ。

それに伴って、適性のない子供を捨てたりする非常識な親が急増した。

ありえないかもしれないが、それが今の社会なのだ。

（……………まあ、いつか）

俺は暗い雰囲気になるのを必死に堪えて考えるのをやめた。
そして俺も商店街へと向かうのだった。

第2話 商店街で（前書き）

今回、いよいよ主人公の能力の片りんが現れます。

第2話 商店街で

そんなこんなでやってきました商店街。

「ここが、商店街か」

さっきの中井さんが話した商店街は、一番にぎやかな場所らしい。そもそもここしか買い物できる場所がないのだから当然と言えば当然なのだが……。

「ま、早く目的の物を買って下宿先に行くとしますか」

俺はすっかり歯ブラシを買うのを忘れていたのだ。

つまりここに来た目的はそういう事だ。

そして俺は、歯ブラシを買うために商店街を彷徨うのであった。

矛盾の魔法使い 第2話「商店街で」

「ふう……ようやく買えた」

商店街で彷徨うこと30分。

ようやく売っているお店が見つかったのだ。

「なんでデパートじゃなくて薬局にしかないんだよ……」

俺は不満を口にする。

普通は百貨店やデパートとかにあると思うのが当然だ。

だが、デパートにはそう言ったものはなく、ただ食品などが売られている場所だったのだ。

そして歩き回ってようやく薬局を見つけたということだ。

「さあ、これで上栄荘に行けるな」

そう思い俺は下宿先の上栄荘に向かおうとするが……。

「どこが南口だ？」

今度は商店街の中で迷っていた。

前にもらった行き方が書かれた紙には商店街の南口から徒歩5分と記されていた。

俺は完全にその南口がどこなのかが分からなかったのだ。

「や、やめてください!」

「ん？」

そんな時俺の耳に聞こえてきたのは、少女の声だった。

俺はその声のした方を見た。

そこには青髪を後ろに束ねた少女に絡む三人のキザな男がいた。

「良いじゃねえかよ」

「あなた達に付き合っていられる時間はないんです!」

どうやら男達が強引に連れて行くこうとしているようだ。

「てめえ! 俺達は”魔法使い”なんだよ!! 痛い目見たくねえんなら大人しくついて来い!!」

「……………そこまでにしたらどうだ？」

俺はいてもたってもいられなくなり、男どもと少女の間に立ちながら声をかけた。

言っておくが、俺は普段はこんなことはしない。

どちらかと言うと厄介ことを避ける性格だ。

目立ちたくないというのも理由の一つなのだが、魔法使いだからという言葉を聞いてそれを無視するほど、俺は出来た人ではない。

「何だよ、テメエ」

「通りすがりの魔法使いだ。その子嫌がつてるじゃないか。やめてやったらどうだ？」

俺は睨みつけてくる男たちに諭すように告げた。

魔法使いと非魔法使いの力は圧倒的だ。

それが相手がか弱い少女や女性であるのならなおさらだ。

魔法使いに対する優遇政策は、それを進めていた総理が辞任されたため、今では無いが未だにこうした差別感情が残っているのだ。

それが魔法使い〃偉いという公式だ。

「うるせえ！！ 黙って聞いてれば調子こきやがって！！！」

「ひいッ！！！」

ついに我慢できなくなった男の一人が、そう叫ぶや否や杖を俺達に向けて掲げてきた

少女が悲鳴を上げたことからおそらくは普通の人だろう。

「テメエら諸共、俺達を怒らせたことを後悔させてやる！！」

（こりゃ、向こうはやる気だな）

俺は厄介なことになったなと、ため息交じりに思いながら少女を飛ばうように立つ。

数は一対三。

数では負けてもこの程度で俺がやられるわけがない。

（何か良いものはないかな）

俺はあることをするために必須のものを探した。

それは棒状のものだ。

俺は刀を媒体として使っているのだが、それは寮の方に送ったのではないのだ。

なので棒状のもので代用する手段を取った。

そこで、俺は少女の片手に棒状のものが握られていることに気づいた。

「ねえ、君」

「は、はい。なんですか？」

俺の問いかけに、少女は怯えながら聞き返してきた。

「その右手に持っているもの、少し貸してくれないか？」

「は、はい………どうぞ」

見ず知らずの俺に、快く持っていた物を差し出してくれたことに、若干驚きつつもその物を相手に向けて掲げた。

「俺の後ろから離れるなよ」

「はっ！ 何だ何だ、散々えばってそんな棒つきれを使うとは。傑作だな！」

「安心しろ。これでもお前ら程度の雑魚に勝つくらい造作もないか

ら」

俺は相手の挑発に挑発で返した。

その間、俺は魔力で少女から借りたものの耐久性を強化した。そうしなければ確実に折れるからだ。

「だったら、見せて貰おうじゃねえか！！ リ・ライム・アステルジ！！！」

（よっしゃ来た！！）

俺は心の中でガッツポーズをとった。

男にとつて、今この時この瞬間魔法を放ったことが運のつきだ。確実に俺の勝利を約束させたのだ。

（この棒のリーチは約0.5m。タイミングは慎重に）

俺は目の前に迫りくる、金色の魔法球をしっかりと見据える。そして俺の射程範囲内に入った。

「甘い！ リ・ライム・アステルジ！！」

俺は男と同じ呪文を唱えながら、棒を横に振りかぶる。

するとまるで野球ボールがバットに当たったかのような音を立てて、俺に迫っていた魔法球はそれを放った男の元へと”向かって”行った。

「なッ！？ ぎゃあああ！！」

突然の事態に、男は成すすべもなく自分の放った攻撃魔法を食らい

地面に倒れ伏した。

「な、何しやがった!!」

「答える義理はない」

明らかにおびえている様子の男達に、俺はそう告げた。
このまま逃げてくれればいいんだが。

「お、俺達は二人だ。総攻撃すれば勝てる!!」

どうやらこの二人はあきらめが悪いようだ。

「ル・アクレル・ラムレア!!」

「ルージュ・ベルツサ」

ほぼ同時に放たれた赤い魔法球と、青い魔法弾がこっちに向かってくる。

（弾数20発。後ろを守りながらだときついな）

「インベル・イレイズ」

俺は速度の速い魔法弾の方を、目の前に転換した魔力無効化結界で打ち消すと、残った魔法球をさつきと同じ要領で男達の元へと向かわせる。

「ぎゃああああ!!」

そして二人目の男を倒したところで、俺はもう一度残った男に問いかける。

「まだ続けるか？」

「お、覚えてるよ！……！」

今度こそ男たちはしつぽを巻いて逃げて行つた。

「ふう………」

俺は作業終えた達成感に、浸りながら汗を拭くしぐさをする

「あ、あの！」

「ツと、これありがとな。助かったよ」

俺は少女が声をかけてきたので、手に持っていた物を少女に返した。

「あ、はい………ではなくですね、その——」

「って、ヤバッ！……！ ごめん俺急いでるからこれで失礼！……！」

俺は時計を見ると、寮の門限の時間が迫っていたので、少女にそう言いながら、慌てて走って行くのであった。

??? Side

「うるせえ……！ 黙って聞いてれば調子こきやがって……！」

「ひいッ……！」

私は突然現れた私と同年ぐらいの黒髪の男の人にキレて杖をかざすのが見えたので、思わず悲鳴を上げてしまいました。

「テメエら諸共、俺達を怒らせたことを後悔させてやる!!」

私はどうしようかと思いました。

この男の人達は杖を持っていることから魔法使いだと分かります。でも今日の前にいる人はそんなものを出すすぐさは一切しないで周りを見渡しています。

(この人に怪我をさせちゃう)

私はそう思っただけで目の前にいる人に逃げるように言おうとした時でした。

「ねえ、君」

「は、はい。なんですか？」

目の前に立っている人の言葉に、私は思わず怯えた風に答えてしまいました。

「その右手に持っているもの、少し貸してくれないか？」

「は、はい………どうぞ」

黒髪の男の人が言っているのは、私が部活で使っているクリケットの道具です。

とても大切な物ですが私はこの人なら大丈夫だと思ってそれを渡しました。

「俺の後ろから離れるなよ」

私は、男の人の言葉に胸が高鳴るのを一瞬ですが感じました。

「はっ！ 何だ何だ、散々えばってそんな棒つきれを使うとは。傑作だな！」

「安心しろ。これでもお前ら程度の雑魚に勝つくらい造作もないから」

男の人の挑発に、黒髪の男の人が挑発し返します。

「だったら、見せて貰おうじゃねえか！！ リ・ライム・アステルジ！！！」

とうとう男の人が魔法を放ちました。

それはものすごい速度で私たちに迫ってきます。

「甘い！ リ・ライム・アステルジ！！」

私は信じられないものを見ました。

なんと、男の人が放った魔法を跳ね返したのです。その魔法は放った男の人に向かって行きました。

「なッ！？ ぎゃあああ！！」

私は突然の事に言葉が出ません。

「な、何しやがった！！」

「答える義理はない」

怯えている様子の男の人に、黒髪の男の人は平然としています。

「お、俺達は二人だ。総攻撃すれば勝てる！！」

二人の男の人はそう叫ぶと呪文を唱え始めます。

「ル・アクレル・ラムレア！！」

「ルージュ・ベルツサ」

そして一気に放たれたのは大量の魔法の球でした。

それに対して黒髪の男の人は、片手を前方に掲げると呪文を唱えます。

「インベル・イレイズ」

すると、私達の近くに到達した青い魔法の球はまるで最初からなかったように消えました。

そして赤い魔法の球はさっきと同じように跳ね返しました。

「ぎゃああああ！！」

「まだ続けるか？」

「お、覚えてるよ！！！！」

黒髪の男の人の問いかけに、男の人は慌てた様子で逃げて行きました。

「ふう……」

（お礼、言わないと）

「あ、あの！」

「ッと、これありがとな。助かったよ」

私は男の人に声をかけますが、男の人は私にクリケットの道具である”バット”を返してくれました。
見た目では罅は入っていません。

「あ、はい………ではなくですね、その——」

「って、ヤバッ！！ ごめん俺急いでるからこれで失礼！！」

再び勇気を振り絞ってお礼を言おうとすると、男の人は何やら慌てた様子で走って行きました。
結局私はお礼を言えませんでした。

「お礼、言わなくちゃ」

私はそう心に誓いました。

「……………また会えるといいな」

小さな声でそう呟きながら、心の中でお願いを試みたりします。
そして私は帰路につくのです。

S i d e o u t

第3話 寮と出会い

俺はようやく目的地へと訪れることが出来た。

「ここが上栄荘」

目の前にあるのは木造の旅館のような建物だったが、ちゃんと門には木製の札で『上栄荘』と書かれていた。

「とにかく入ろう」

俺はそう思い引き戸を開けた。

「ごめんください」

「はい！」

俺の声に反応して、奥の方から女性の声が返ってきた。
しばらくすると背の高い黒い髪の女性が姿を現した。

「こちらにどのようなですか？」

「あの、今日ここに下宿させてもらうことになった尾崎ですけど」

俺はそう言って、紹介状を女性に手渡した。

「ああ、あなたが明日鳴神高校に転校する生徒ね。私はここの寮長をしている田土沙月たどつきです。困ったことがあったら色々聞いてね」

「あ、俺は尾崎圭一です！」

思わず背筋を正して田土さんに自己紹介をした。

「ふふ。それじゃこの案内をするわね。付いて来てくれる？」

「あ、はい！」

俺は田土さんの後に続くように足を踏み入れた。

矛盾の魔法使い 第3話「寮と出会い」

「ここがリビングね。今はいないけど、よくここに住んでいる人たちが集まるから来てみるといいわよ」

案内が始まって5分。

ほとんどの場所を案内された。

「と、大体はこのぐらいね。何かわからない所はある？」

「あ、いいえ。特には」

俺の答えに、田土さんは笑顔で頷いた。

「それじゃ、あなたの部屋で荷物の整理をしておくといいわ」

「それで、失礼します」

俺は田土さんに一度お辞儀をすると、宛がわれた部屋へと向かった。

(109……ここか)

部屋番号を確認して俺はドアを開けた。

「ようこそ、鳴神町へ」

「……………」

俺は無言でドアを閉めた。

「……………何？」

俺はもう一度部屋番号を調べたが、やはり俺に宛がわれたところだった。

「ようこそ、上栄荘へ」

「……………」

俺はもう一度無言でドアを閉めた。
もう勘違いではない。

「あのおゝ、さすがにスルーされるのはきついんだけど」
「何をやってるんですか？」

俺が思いっきりドアを開けて、中にいる人物を問いただす。

「何って、明日転校してくる奴の顔を見ようと思ってな」

そういう人物は俺と同年で、青髪が目元が若干細めの長身の男だった。

「……………」

「おっと！ 紹介が遅れたな。俺は野村^{のむら}隆^{たかし}。よろしくな」

「尾崎 圭一です。よろしくお願いします。野村君」

「隆でいいぜ。同年なんだから敬語も不要！ さあ、もう一度！」

若干テンションが高いやつだなと思いつつ、俺はもう一度言い直すことにした。

「尾崎圭一。よろしくな、隆」

「ああ、よろしく」

俺と隆は固い握手を交わした。

「はあ……腹減ったな」

あれから一通り荷物の整理を終えた俺は、そう呟いた。
結局夕食の時間に間に合わなかった俺は、夕食を食べることが出来なかった。

「食べられそうなものは一つもないし……明日まで我慢するか」

「えゝ。それって体に悪いよ？」

「しょうがないだろ。食べるもんないんだし」

俺はさっさと寝ようと立ち上がる。

「だったら、私が何かあげようか？」

「お、あるんなら貰いた——」

俺はそこまで言ってようやく気付いた。

（俺、一体誰と会話してんだ？）

「ん？ どうしたの？」

「……お、おまえは！？」

横を向いて、声の主を見たとき俺は思わず声を上げてしまった。

「こんばんは。さっきぶりだね」

その人物は昼間、なぜか仲良くなった中井さんだった。

「ありがとな。助かったよ」
「す、すごいね」

中井さんがものすごい様子で空っぽになったお皿を見た。
中井さんが出したものは、夜食用に取っていたサンドウィッチだった。
それを俺は全部平らげてしまった。

「いや、朝食べてから何も食べてなかったんだよ」
「へえ」

中井さんが頷いた。

「それにしても驚いたよ、中井さんがここにいるなんて」
「それは私もだよ。まさか転校生が尾崎君だなんて思いもよらなかったよ」
「だな」

俺と中井さんは笑いあった。
それからしばらく、俺と中井さんとで楽しく話したのであった。

第4話 洗礼を受けし、初登校

昨晩は結局夜遅くまで話し込んでしまった。

「——きろ！」

「……ん」

俺は耳に聞こえてくる声を無視して、寝ようとする。

「起きろって!!」

（しつこいな。俺はまだ寝ていたいんだ）

俺は心の中でそう愚痴った。

何せ寝たのはわずか5時なのだ。

中井さんが戻ったのが11時。

その後手続きの事を思い出して、転校の書類をまとめたり、荷物整理をする等々の事をやったのだ。
その結果寝れたのが5時過ぎだった。

「起きろ!!!」

「うがつ!？」

俺は背中に鈍い痛みを感じて、思わず飛び起きた。

「いたたた……」

「やっと起きたか」

呆れたようにつぶやく隆をしり目に、俺は背中の痛みにつずくまっ

ていた。

「何すんだよ、いきなり」

「それはこれを見てから言って」

そう言っつて隆が俺に差し出したのは、時計だった。

「これが一体なんだって——」

俺は思わず、フリーズした。

そこに表示されていた時刻は……午前8時15分。

「寝過ぎした!？」

「そうだよ!!　そして不運にも俺がお前の案内役になった」

隆がここにいる理由が分かったところで、俺の意識はやけにクリアになった。

「と言うわけで……早く支度をしろ!!　まじでこのままだと遅刻だ!!!」

「り、了解!!!」

俺は、慌てて制服に着替える。

確か寮から学校までの所要時間は15分だったはず。

仮に身支度に5分だとしても、かなりやばい。

俺は急いで身支度を済ませるのであった。

矛盾の魔法使い 第4話「洗礼を受けし、初登校」

「はあ！ はあ！ はあ！」

俺は今、全速力で走っていた。
その場所が……

「本当に、ここを走れば学校につくのかよ？」

「ああ、この俺を信じろ！！」

道なき道だった。

何でも隆曰く遅刻しそうなときによく使う道らしいが、はつきり言おう。

「きつ過ぎだ〜！！」

俺の叫びが森の中に響き渡った。

どうしてこうも面倒な方法を取っているのかと言うと、校則に關係する。

校則では、『緊急時や実習以外での魔法行使を禁ずる』と明記されている。

つまり、それ相応の事態に巻き込まれたり、実習の授業がある時以外は魔法は使ってはいけないのだ。

勿論使えば厳しい処分が待っている。

「俺達の学校は立門があつてな!!」

「立門!？」

走りながら俺は器用に、この学校の事を教えて貰っていた。

にしても立門なんて、前にいたところではやってなんかなかったぞ。

「ああ、予鈴が鳴ると門を閉めて、遅れてきた奴にはそうれはもう恐ろしい罰が!!」

「な、なるほど」

俺は、隆がそれを受けたことがあるのだと言うことがすぐに分かった。

なので、俺も全速力で走る。

「そこ、滑りやすいから気を付けろよ!」

「お、おう!」

今通っているのは川だ。

とはいっても、川のところどころに出ている石の上を飛び移っているのだ。

何とも苛酷だ。

それが終わると、目の前に学校らしきものが見えてきた。

「喜べ! ここをまっすぐ行けば校門前だ!」

隆の言葉に俺は希望を持った。

「残りあと30秒。間に合うのか!？」

「間に合う! 気合を出せば!！」

そう言っただけはあろうことが、俺の腕をつかんでさらに走る速度を上げた。

目の前には校門、そして横からは俺達と同じなのか、ものすごい勢いで走ってくるオレンジ色の髪をした女子生徒。

って、女子生徒!？

今の状況ってかなりやばいのではないか？

隆の走る速度と女子生徒の走る速度はほぼ同等つまりは……

(このままだと校門の直前で激突する!)

俺の導き出した答えのように、だんだんと女子生徒が接近している。

本人も、俺達に気付いてない。

(ええい、こうなったら!！)

「隆、すまん!」

「は? 何が——って、うぎゃああ!！?」

俺は隆を後方へと吹き飛ばす。

だが、校門の方へと吹き飛ばされた俺はというと……

「ど、どど退いてください!！」

そう言う女子生徒の声もむなしく、俺と女子生徒はぶつかった。

「いてて……」

痛みがあるが、なんかなたらしく無事の様だ。

（そう言えば女子生徒は！？）

「ううゝ」

ぶつかったもう一人の女子生徒の事が気になった時、なぜか声が俺上から聞こえてきた。
声の方を見るとそこには、俺に重なるように倒れる女子生徒の姿があった。

「あ……」

俺と女子生徒との目が合った。

「だ、大丈夫……か？」

「は、はい。すみません。すぐにどきますね」

そう言つて女子生徒が退こうとするが、なぜか固まっていた。
その原因はすぐに分かった。

顔を赤らめて下の方を見ている。

そこには……彼女の胸を掴んでいる、俺の手があった。

「あ、えっと……悪い」

「あ、気にしないで……ください」

俺はすぐに手を放して、謝った。
感触は忘れよう。

「あ、えつと私は松井加奈まつい かなと言います。ここの1年です。」
「俺は、転校してきた尾崎 圭一。色々な意味で悪かった」

俺は自己紹介をしながらもう一度頭を下げた。

どんな経緯があれど、女子の胸をもむなんて破廉恥すぎる。

「あ、気にしないでください。私がドジなのが原因なので」
「それよりも、時間大丈夫か？」

俺は腕時計を指さしながら聞いた。

申し訳ないが、限がなさそうだったので、時間を確認させることにした。

「うわあ！？ す、すみません。これで失礼します！」

松井さんはそう言うのと、慌てて校舎の方へと入って行った。

（変わった子だな）

そう思いながら、俺も中に入ることにした。

「ぎゃあああああああ！！！」

そんな時、隆の断末魔を聞いたような気がしたが……気のせいだろう。

第4話 洗礼を受けし、初登校（後書き）

なんという王道だというのはなしで。

第5話 挨拶

「もう少し早めに来てくれると、私の方も嬉しかったんだけどね」
「すみません」

俺は、担任の田土さんの言葉に只々謝るしかなかった。
職員室に到着して出てきたのが、田土さんだったので、驚いた。
彼女曰く、俺が行くクラスの担任らしい。

「ま、いいわ。っと、ここよ」

到着したのは、『1年3組』と言うプレートがある教室だった。

「合図をしたら、入ってくれる？」

「あ、はい」

田土先生は、俺にそう告げると、先に教室の中に入って行った。

『はい、みなさん静かにして。HRを始めるわよ』

田土先生の声が聞こえてくる。

俺は、深呼吸して落ち着く。

『お、沙月ちゃんは今日も可愛——ブベラ!?!』

『野村君、あまり調子に乗らないでね?』

なんか教室からすごい音がしたが、一体何があったんだ?

『では、今日はなんと転校生が来ています』

田土先生の言葉と同時に、クラス中がざわつく。

『それでは、どうぞ』

ついに来た。

ここでミスをすれば一生の笑いものだ。

そんなことにならないように、俺は深呼吸をすると、ドアを開けた。

矛盾の魔法使い

第5話「挨拶」

そこはごく普通の教室と同じだった。

だが、やはり魔法使いの育成機関と言うだけあって、壁に対魔力コーティングが施されている。

これがあれば、魔法の暴走が起きても校舎にダメージは入らないだろう。

そして俺は、教卓に立つと黒板に自分の名前を書く。

やがて書き終えた俺は、くると回転しクラスを見た。

「……………」

「……………」

そこには中井さんと隆の姿があった。

「尾崎 圭一です。訳合つてこちらに転校してきました。色々ご迷惑をおかけすると思いますがよろしく願います」

俺はそう言つと、静かに頭を下げた。
しばらくすると、拍手が沸き起こった。

「それじゃ、尾崎君は空いた席に座つてね」
「はい」

そして俺は空いていた席に着く。
隣にいる人物を確認した俺は、驚きを隠せなかった。

「宜しくね、尾崎君」

そこにはあのにこやかな笑顔で手を差し出す中井さんの姿があった。

俺は、その手を取り握手をする

「それでは、授業を始めますよ。教科書を出してくださいね」

田土先生はそう言つと、周りは教科書を取り出す。

俺もそれにならない教科書を取り出す。

俺の一日は、まだ始まったばかりだ。

第6話 魔法授業（前書き）

かなり時間が開きすみません。
第6話です

第6話 魔法授業

「魔法文化が発見されたのは、今から千年前になります」

今受けている授業は魔法史だ。

つまり魔法の歴史のようなものだ。

どうでもいいが魔法使いの偉人は数多く出ている。

しかし、やはりここでも魔法の格差は存在しているのか、有名になっている人物の絵にはすべて杖を持っている姿しか見かけない。

『魔法使いは杖を媒体としなければいけない』

それが何時しか決まりとなっていた。

その風習は今でもあるようで、この学園の9割が媒体で杖を使っている。

後の1割は媒体を持たない上級者か、俺のように杖以外の者を媒体としている者だ。

矛盾の魔法使い 第6話「魔法授業」

「それより前に誕生していたのか、それともどこからやってきたのかは、いまだ解明されていません」

先生の説明は続いていた。

どうやら今日の内容は魔法の発展らしい。

先生が言ったように魔法と言うものは突然発見され、増発的に拡大していったらしい。

それは何らかの意図的によるものではないのか、それとも何処からかやってきたものかは解明されていない。

「この時魔法使いの最初の偉人となるのが――」

その後も永遠と続いて行く先生の説明。

クラスを見渡すと、聞いておらずに近くの人と談笑している生徒、

ノートを広げた状態で眠っている生徒や閉じたまま最初から授業を受ける気のない生徒。

そして、真剣に先生の話の聞いている生徒と、その差はまちまちだ。

大体、最初の二つが4割を占めている。

（これが、ここの普通なのか？）

俺は心の中で首を傾げた。

転校する際にうまくやって行く秘訣は、目立たない事だ。

目立てばその分厄介なことが舞い込んでくることが多くなるからだ。

特に俺のような存在は、魔法使いにとっては格好の馬鹿にする標的だ。

だからこそ、静かに俺はノートに写していく。

ちなみに俺の横にいた中井さんは後者の方であった。

「それでは、魔法基礎教養を始める。テキストの35ページを開いてください」

2時限目は魔法の基礎教養だ。

魔法を使うのには魔法に関する知識が必要だ。そう言う観点から、この科目はある。

「前は魔法の属性効果と優越についてやりました。今回は属性の付加方法について説明します」

担当教師がそう言って授業を始める。

この二つの授業を受けて思ったことがある。どちらも進みが遅いのだ。

俺は色々な場所に点々としていたが、前にいた場所では、すでに極限属性の行使方法まで行っていた。

ちなみにこの極限属性の行使方法は最難関のジャンルだ。

何せ極限属性を扱えるのは100人の魔法使いで、10人いればいい方だからだ。

それほど難しい属性と言う事だ。

補足するのであれば、闇属性はもっとも操縦が難しく下手をすると闇を周りに解き放ってしまう。

光属性も制御を間違えればすべての物や人を浄化するのだ。

浄化と言っても清めるのではなく、完全に消し去るのだ。

それほどの危険属性なのだ。

さて、話を戻そう。

この授業も授業態度がバラバラだった。

他の生徒と話すもの、居眠りをするもの、真剣にノートに書きとるもの。

様々だ。

最初の二つだけで9割なのが驚きだ。

俺や中井さんはその貴重な1割に入っているのだろう。

しかし教師はそんな生徒たちに注意しない。

まるで、生徒たちが最初からいないと思い込んでいるとばかりに、ただ機械的に説明をしていくだけだった。

（なるほど……な）

それだけで分かった。

ここがどれほど荒んだ生徒で埋め尽くされているのかを。その後も三限の授業を受けたが、二限の時と同じだった。

だが、四限の時だけは違った。

「それでは、魔法薬学の授業を始めます。教科書39ページを開いてください」

そうやって先ほどと同じように促すと全生徒が教科書を開いたのだ。

俺はその光景に驚きつつも、教科書の指定されたページを開く。
その後、クラスの誰一人として居眠りや死後はしていなかった。

（何なんだ？ この学園）

俺はそう思い首を傾げたのであった。

第7話 夏休みと一悶着（前書き）

今回、新キャラが登場します

第7話 夏休みと一悶着

「それでは、今日はここまでとします」

四限が終わると同時に、生徒たちは昼食の準備に移る。

「ねえねえ、お昼はどうするの？」

「あー、俺弁当用意してないから、食堂にしようかって思ってるんだ」

突然聞いてきた中井さんに、俺は朝の惨状を思い出して苦笑いを浮かべながら答えた。

「あ、それじゃ私が案内してあげる」

「お、何だ何だ面白そうだな。この俺も参戦するぜい！」

快く名乗りを上げてくれたのは、隆だった。

「サンキュ、二人とも」

「言いのいいの、お近づきのしるしだよ」

「そうだぜ。同じ男同士、仲良くやろうぜ」

そう言ってくれる二人の優しさが、とても俺には嬉しかった。

矛盾の魔法使い 第7話「昼休みと一悶着」

「ここの食堂は料理の味もいいことからものすごく混むんだ。だか

「もし食堂にするんなら早めに行くことだ」

「そうしないと、日替わり定食はすぐに売り切れになるし、食べる時間もなくなっちゃって最悪の場合は知って教室に行くことになるから気を付けてね」

「わ、分かった」

俺は二人からのアドバイスを必死に覚えた。

食後すぐに走ると体に悪いのは周知の事実だ。

俺はそう言う目に合わないと言ったのであった。

「ちなみに、今から言ったらアウトか？」

「いやいや、まだ昼休みが始まって5分だからまだまだだ。でも、あと5、6分遅れればダッシュで教室に行くことは決定になる」

何とも微妙な時間帯だ。

そんな時であった。

「す、すみません」

「ん？」

どこかで聞いたことのある声を聞いたような気がした。

「おい、どうした？」

「いや、向こうの方から声が」

突然立ちどまった俺に隆が聞いてくるので、俺は声のする方を指さした。

その方向には金色の髪をしているいかにも優男の風貌をした男子学生が、青髪を後ろに束ねたどこかで見たことのある女子生徒に絡んでいた。

「どれどれって、あいつは4組の勘坂！」

「勘坂？　どういう奴なんだ？」

「サイテーな奴だよ。ちよつとばかり魔法の腕がいいからって自分より下の人を馬鹿にして奴隷のように扱うの」

「しかも、あの様子だと彼女に何かを買わせて、それが気に入らなかったからいちゃもん付けているようだぜ」

俺の問いかけに答える二人の顔色から、あいつがどういう奴かはすぐに理解できた。

俺が最も嫌う部類の奴だと言う事だ。

しかも、周りの者は誰一人として助けようもしない。
そして俺はその方向へと歩き出した。

「だから、圭一も関わらない方が……って、既に行ってるし！！」

後ろで隆が何やら叫んでいるが、俺はそれを無視して勘坂に声をかけた。

「おい、そこまでにしたらどうだ？」

「あん？」

俺が声をかけたのと同時に、鋭い視線が俺に突き刺さる。

気を抜けば逃げたくなるような視線だ。

俺はそれに耐えつつ一歩前に出た。

「お前、1年か。しかも見慣れない顔からして、おまえが”あの”転校生か」

「その”あの”が気になる所だけど、その通りだ。ここに転校してきた尾崎 圭一だ」

俺は勘坂を見据えて名前を名乗る。

言葉にもできないほどの気持ち悪い視線で俺の姿を観察する。

「ああ、思い出した。お前、魔力はあるのに魔法が使えない”出来損ない”の、魔法使いだったっけな」

”出来損ない”それが、俺の一般評価だ。

魔力を持っているにも拘らず、魔法を放つことが出来ない。

魔法使いにして魔法使いではない存在。

だからこそ、出来損ないだ。

それも今は少しばかり違うが。

「それで、出来損ないの転校生は、この超エリートな俺様に何の用かね？」

勘坂の”出来損ない”というフレーズに、周りが笑い声で包まれた。

その声は、すべて俺を馬鹿にするようなものであった。

「エリートだからって、力のない者を奴隷のようにするのは間違ってる。それに人としての礼儀を知らない奴がエリートになる資格もない」

「何だと？ 貴様、出来損ないの分際でよくも俺様をコケにしたな！！ 二度とその口が利けないように俺様の力を見せてやる！！」

勘坂は俺の一言に癪癪を起して媒体の杖を構えた。

一気に緊迫した雰囲気へと変わって行く。

「そこまでだ！」

「ッ!!」

「こんなところで乱闘を起こしたら、いくらあなたでもただでは済まないわよ」

突然大声で止めた隆と中井さんの声によって、雰囲気が一変した。

「貴様、覚えておけよ!!」

捨て台詞を残して、勘坂はその場を後にした。

「尾崎君も、厄介な奴に目を付けられたね」

「ああ、何もなければいいんだけどな」

二人は心配そうにつぶやいた。

「二人ともありがとう」

「あの!!」

そんな時、今までからまれていた女子生徒が声を上げた。

「貴方、昨日商店街に行きましたか？」

「あ、ああ。確かに商店街に行っただけ」

突然の女子生徒の問いかけに、俺は慌てて答える。

「それじゃ、そこで男に絡まれている人を助けたりなんてしました？」

「っ!?! やっぱ、君が昨日の!?!」

女子生徒の最後の質問ではつきりした。

目の前にいる人物は、先日商店街でからまれている少女を助けた時の人だと。

「はい！ 1年2組の、宮野^{みやの} 知美^{ともみ}って言います。この前は助けてくれてありがとうございます！」

「あ、いや、あれは俺が勝手にやった事だから。お礼なんて言わなくていいって」

俺は、お礼を言う宮野さんにそう言った。

俺としても、お礼を言われるためにやった物でもないのだから。

「知ちゃん、どこ？」

「あ、それじゃ私はこれで失礼しますね」

「ああ、気を付けて」

誰かの声に宮野さんは俺達に一礼すると、声の方に駆け寄って行くのであった。

「それにしても意外だな」

「何がだ？」

突然興味深げに声をかけてきた隆に、俺は聞き返した。

「いや、自分の危険も顧みずに声をかける所がさ」

「うんうん、私もびっくりだよ」

二人にそう言われると、どうも自分のしたことが今更恥ずかしくなってきた。

「あ、ところでさ。時間は大丈夫なのか？」

俺は気になったので二人に聞いた。

どう見てももう6、7分は経っているようにも感じた。

「……………」

そして二人は嫌な沈黙を続けた。

「二人とも、走るぞ！！」

「ラジャー！！」

「結局こうなるのか！！」

この後、俺は史上まれにみる早食い&超特急をする羽目になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1999x/>

矛盾の魔法使い

2011年11月16日09時45分発行